

Title	書評：渡辺秀樹・竹ノ下弘久編著『越境する家族社会学』学文社、2014年
Sub Title	
Author	木戸, 功(Kido, Isao)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.199- 202
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「書評：渡辺秀樹・竹ノ下弘久編著『越境する家族社会学』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0199

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：渡辺秀樹・竹ノ下弘久編著

『越境する家族社会学』学文社、2014年

木戸 功

本書は、編者の1人である渡辺秀樹氏の指導を仰いだ13人の執筆者が、その恩師とともにまとめた論文集である。

とりわけ現代社会においては、家族を素朴に家族としてのみ研究することはますます困難となってきた。それは理論的な観点からの要請でもあるだろうし、また、現実の家族変容によるものでもあるのだろう。いずれにせよ社会のなかの家族という観点から、隣接領域との関わりを考慮した家族研究がより強く求められるようになってきたのである。そうしたなかで、学問としての家族社会学は、本書でいうところの「『越境的』な特徴」(p. vii)を必然的に備えるにいたったといえよう。

興味深く思われるのは、本書のような「越境的」な家族社会学の著書が、1人の研究者(教育者)を中心として編まれているということである。執筆者には家族社会学を専攻する研究者もいるが、それ以外にも、社会学理論、教育、階層、エイジング、セクシュアリティ、エスニシティ、グローバリゼーション等を専門とする研究者に加えて、心理学の専門家も含まれている。家族社会学の専門家のなかにも、量的な観点から少子化やワークライフバランスをとりあつかう者もいれば、構築主義のような立場から質的な研究に携わる者もいる。家族を共通のトピックとしながらも、本書のカバーしている内容は縦横の広がりと多様性をもつ。しかしながら、同時に、そうした広がりと多様性を考慮しなくては家族という対象の研究はもはや成り立たない。こうした認識によって、本書の家族社会学の著書としての統一性が担保されているのであろう。もう1人の編者である竹ノ下弘久氏による「まえがき」において、渡辺「先生」への謝辞が述べられているが、本書はまさに渡辺氏による育成の成果といえよう。慶応義塾大学(大学院)渡辺ゼミの懐の深さと、そこから巣立った研究者の底力を感じる。

本書は4部構成、14の章と終章からなる。順にみていこう。

「性別役割分業とワークライフバランス」と題された第1部は3つの章からなる。第1章では、日本を含む5カ国の国際比較を通じて、日本の出生と家族の動向が分析される。日本の少子化対策は「仕事と出産・育児の両立を支える」(p. 16)ことを柱としてきたが、それは結果として育児期の夫婦の多数を占める分業型夫婦や、雇用環境の悪化にともなう結婚のしにくさを経験している若年層をターゲットから外すことによって、期待される効果を発揮できなかったことが指摘される。つづく2つの章ではジェンダーがトピックとなっている。第2章では「男性」の育児参加をめぐる、「男性は仕事、女性は家庭」というような狭義の性別役割分業には

木戸功「書評：渡辺秀樹・竹ノ下弘久編著『越境する家族社会学』
『三田社会学』第20号(2015年7月)199-202頁

反対しつつも、「男性の稼ぎ手役割」には賛成する層に着目し、男性自身による「性別役割分業意識の多元性」が考察される。男性の性別役割分業意識に対しては、本人の社会的属性よりも配偶者の就労形態や収入による効果が明確であり、また、そうした意識が男性の育児参加の度合いに影響を及ぼしていることが明らかにされる。それに対して、第3章では「女性」の就業と子育てが論じられる。そこでは「女性の就業行動を説明する理論的枠組み」(p. 40)をマクロ、メゾ、ミクロの水準ごとに整理したうえで、「出産・育児期」に加えて「ポスト育児期」の女性の就業が、これまでの研究をふりかえることで考察される。そのうえで、女性の就業と子育てをめぐる研究においては、「有配偶女性の出産・育児期の就業継続」(p. 51)のみならず、ポスト育児期に加え、離別や死別を経験したより多様なライフコースを視野に入れた研究の必要性が指摘される。

つづく第2部は「教育と親子関係」と題され、4つの章からなる。第4章では、個人の教育選択や教育達成において、「親(家庭)の経済力や意志」(p. 67)といった家族的背景の影響の大きさが実証的に明らかにされる。社会階層論の観点から、個人の自己責任ととらえられがちで教育機会の不平等という問題が批判的に論じられている。第5章はブルデューが「ハビトゥス」や「戦略」といった理論的道具をどのように彫琢し、一般理論へと結実させていったのかということが、「文化的再生産」や「配偶者選択」をめぐるかれの「越境的」な「家族研究」を詳細に検討することによって論じられる。第6章は渡辺氏による「一次的社会化から二次的社会化へ」である。公私分離した近代社会においては、個人の二次的社会化が選択的、ゲゼルシャフト的なものとなるがゆえに、家族という環境におけるゲマインシャフト的な一次的社会化からの移行は不連続なものとなった。さらに現代社会(後期近代)においては、二次的社会化の選択性は高まり複雑性を増すことで、一次的社会化からの移行のギャップが増大している(「断絶」(p. 94))。加えてゲマインシャフト的な一次的社会化の環境(つまり家族)それ自体の維持も困難となってきた。それゆえに「越境」が求められる。「社会化」という概念が、たとえば「構造」や「機能」などととも社会学が共有すべき財産(legacy)であることを示唆する論考といってもよいだろう。第7章は心理学の立場から非行と家族が論じられる。非行の原因として家族の要因があげられがちであるが、その理由として、家族が子どもの「社会化の重要なエージェント(担い手)」(p. 116)であること、および子どもの発達にとって重要とされる愛着形成の対象であることが指摘される。しかしながら、これまでの研究をふまえたうえで、非行のリスク要因はより複雑で多様であることから、より包括的な支援のあり方が重要であることが論じられている。

5つの章からなる第3部「構築される家族、ジェンダー、セクシュアリティ」のキーワードは構築主義と性的マイノリティといつてもよいだろうか。第8章では、家族社会学研究における構築主義アプローチがとりあげられる。席卷、空疎化、誤解と批判という、日本においては短期間のうちにめまぐるしく展開(転回)してきた構築主義をふりかえったうえで、経験的研究の蓄積こそが現在求められると著者は指摘する。家族社会学の本流とはいえないようなこうし

た論考が収められているところも本書の魅力の一つである。第9章は、こうした構築主義的アプローチとも理論的・方法論的に関心を共有する。臨床心理学の立場から「ナラティブ（物語）の治療的意義」（p.144）を論じたこの章では、著者が関わりをもったクライアントとのやりとりが事例として考察されている。出来事の意味を、出来事そのものからではなく、それに意味を付与する人々とそれを可能とする文脈や関係性から探ることの意義が示されている。つづく第10章も構築主義的な家族・ジェンダー論といえるものである。女性が被告となった3つの事件を題材として、「刑事司法における解釈資源としてのジェンダー」（p.155）が検討されている。そこでは「性別役割」の評価を組み込んだ家族の典型的イメージである「家族のプロトタイプ」が、事実認定のための事後的な解釈資源としてだけではなく、それに先行する前提ともなりうるものが批判的に論じられる。つづく2つの章はいずれもセクシュアリティとの関わりから現代の家族あり方を考察している。第11章では、「性的少数者」をトピックとしながら、家族と身体に対する国家による規制が批判的に論じられる。法的に保障されるべき正当性を認められた身体・セクシュアリティおよびそれにもとづく家族という枠組みに、それにはおさまらない人々をいかに「包摂」していくかということではなく（「性別取扱特例法」や「同性婚」など）、むしろ多様な身体、多様な家族に対して「いかにサポータティブでありうるか」（p.184）こそが国家の役割であるとする主張は示唆に富む。第12章のテーマは「ゲイのエイジング」である。90年代以降の日本におけるゲイコミュニティの成熟は、当事者のエイジングという課題を「発見」するにいたった。婚姻制度内での「定番の生き方」（p.196）とは異なる老い方・生き方を早い時期から模索してきたゲイの経験は、ゲイのみのものではなく、誰しもが「再帰的（生成的）に活用」（p.201）可能なものであるという指摘は、家族研究にとっても刺激的なものであろう。

「グローバル化と家族」と題された第4部は文字通り「越境」する家族をとりあげた2つの章からなる。第13章では日本に居住する国際移民の事例も題材としながら、「移民の子どもたち（第2世代）の教育達成」（p.216）とその資源としての家族の関係が議論される。特定の文化的、経済的水準の家族のあり方を前提とした社会制度のもとで、移民が受け入れ先社会の階層構造の下層に組み込まれる場合、家族は子どもの教育達成に積極的に寄与することはできない。そこから浮かび上がるのは、そうした不平等を再生産する社会の制度設計のあり方をいかに変えていくかという課題である。さらに第14章では、移民の子どもたちである「新2世」の若者の「トランスナショナルなアイデンティティ」（p.229）が論じられる。ニューヨークとロンドンに在住する8人の「新2世」の語りから、かれらの一部がトランスナショナルなアイデンティティを抱く状況が明らかにされる。とりわけ「親の出身国および家庭で使用する言語が複数である場合に」（p.241）そうしたアイデンティティの「選択」が可能となることが指摘される。こうした「選択」の可能性は民族的マイノリティであるかれらにとっては、自らの自己と生活を持続していくうえでの戦略的資源となっていることが示唆される。

そして終章である。そこでは家族をいかに越えるかが論じられている。そこでは本書を貫く

「越境的」というキーワードとともに、本書全体とそれから家族社会学の歴史がふりかえられる。ほぼ同じ時期に刊行された渡辺秀樹氏の『モデル構成から家族社会学へ』(慶応義塾大学三田哲学会叢書、2014 年)とあわせて読まれることをおすすめしたい。

14 の章と終章というボリュームはおおむね半期分の大学院でのゼミなどの授業を想定したものであろうか。他のテキストを併用するなどの工夫があれば、学部レベルのゼミなどでも使用できる内容である。本書は現在活躍中の若手から中堅クラスの研究者によるものであり、家族社会学研究にとって最前線の議論が紹介されている。そうした意味でも有用なテキストであろう。と同時に、従来の家族社会学の枠組みを「越境」すること、そしてそうしなくては家族社会学が成り立たないということが示唆されている本書は、家族社会学のベテラン研究者にとっても刺激に満ちたものといえよう。

(きど いさお 札幌学院大学)